

佐伯君の The Nestorian

Monument in China.

(一九一六年出版、三四二頁)

文學博士 桑原 隲藏

倫敦で出版されたものが、即ち表掲の書物である。

この景教碑は、その支那に存在する原碑の外に近年になつて、世界に二個の模碑 Replica が出来た。一は、明治四十年に、デチマルク産のホルム Holm 氏が、支那の西安府で模造したもので、現に米國の紐育市の中央博物館に安置されて居る。一は明治四十四年に、愛蘭士産のゴルドン Gordon 夫人が、我が高野山の奥院に建設したものである。かく世界に僅か二方かない、景教碑の模型の一を有する我國に於て、佐伯君の如き熱心なる景教碑研究者の存在することは、學界の爲にも教界の爲にも、祝福慶賀すべきこと歟と思ふ。

大秦景教流行中國碑は支那に現存する、あらゆる古碑の中で、尤も廣く世間に周知せられ、又尤も深く學界に注意されて居る。明末に發掘されて以來、今日までこの碑に關係する著書論文の世に公にされたものは、實に汗牛充棟と評しても、決して過言であるまい。併し尙ほ研究を要する點が尠くない様と思ふ。佐伯(好郎)君は我國に於ける唯一の熱心なる景教碑研究者である。曩に明治四十四年の末に、『景教碑文研究』を公にされたが、今回更に之を英譯となし、幾多の改訂増補を加へ

著者が尤もその精力を茲に注がれた事がわかる。

佐伯君の新著は大體に於て三部に分れて居る。(一)は序論 Introduction で、主として景教碑の歴史及び東洋に於ける景教の感化影響を述べたもので、百六十一頁即ち全書の半の頁數を占めて居る。

(二)は碑文の英譯で約二十頁、(三)は碑文の注釋で七十六頁ある。この以外に附録 Appendix—主として景教碑に關する支那の記録を蒐録した—や引用書目や索引等がある。體裁は整頓し、英文は明晰で、此等の點に就いては、殆ど間然する所がない様に思ふ。

二

佐君伯が耶蘇教の教義や、沿革に通じて居らるゝ點と、シリア語に達して居らるゝ點とは、この種の研究に、尠からざる便宜を與へたことと想ふ。従つてこの書の長所も、亦主としてこの方面に多い様である。

(I)吾輩が曾て紹介した通り、この景教碑の明末に出土した時代に就いて、尠くとも三種の異説がある。(明治四十三年四月の『藝文』に掲げた「西安府の大秦景教流行中國碑」一八一—一九頁參看)佐伯君は此等諸説を批判して、その最後に金尼閣

Nicholas Trigault 及び艾儒略 Jules Aletti を證據として、この碑の出土年代を西歷千六百二十年以後、千六百二十五年三月以前に在るべきものと斷定されたのは、(二二頁)尤も穩當で、吾輩—三異説の中に就いて、必ずその一を選定した結果、曾て、陽瑪諾 Emmanuel Diaz に従つて、天啓三年(一六二三)説を執つたこともあるが—も亦この斷定に反對することが出來ぬ。

(II)併し佐伯君が、明末にこの碑の發掘された處を、西安の西に當る藍屋 Chou-chin 縣と斷定されたのは、如何にしても同意を表し難い。(A)景教碑の建設された大秦寺は、必ず義寧坊に在つた大秦寺で(B)この義寧坊の大秦寺の所在地は、今の西安の西郊の金勝寺の境内に當り(清の陶保廉の『辛卯侍行記』卷三、及び Havret の "La Stèle Chrétienne de Singan-fou" 第二冊一一七頁に收めたる、唐代長安圖等參看)(C)この碑が唐以後に

他所に移動された證據もなく、(D)明末に他所から金勝寺に移轉された證據もない。此等の事實を綜合すると、景教碑はその建設の當時より、去る明治四十年の秋に、西安城内の碑林に移置されたまで、千百二十七年間、同一の場所に存在した。或時は樹立し、或時は埋没して—ものと認定せなければならぬ。従つて明末の出土も勿論この金勝寺境内に起つた事件である。近く佛蘭西のペリヨ Pélissier 氏なども、吾が輩同様の見解を發表されて居る。(『中亞及び極東の耶蘇教徒』Chrétiens d'Asie Centrale et d'Extrême-Orient. Tsung Pao, 1914. P. 625.)

佐伯君は景教碑の本文に、その建設地は明記されて居らぬから、建設地を何處に假定するも本文と齟齬せぬ(二六頁)と主張されて居るが、碑文と宋の宋敏求の『長安志』の記事と對比すると、この碑は長安城内の義熙坊の大秦寺境内に刱建された

ものと断定するのが妥當と思ふ。佐伯君のこの碑がもと、唐代の洋州又は華陽と稱する所—佐伯君はこの洋州又は華陽を、長安蓋屋の中間に在る地名と認められて居るが、之は柳子厚の文を誤解された結果で、その實洋州や華陽は長安や蓋屋を遠く離れ、今の漢中府附近に當る(『讀史方輿紀要』卷五十六)のである。—に在つた大秦寺境内に建設されたもので、(二六頁八五頁)明末に發掘されて後ち、今の金勝寺境内に移置されたものであらうといふ主張—幾分アヴェン Havret のそれに類似する—には、到底贊同することが出来ぬ。この點に就いては佐伯君の再考を求めたい。

(III)景教碑の刱建されたのは、唐の徳宗の建中二年(七八一)であるが、碑文を見ると、時法主僧寧恕知三東方之景衆一也の句がある。その寧恕のシリア名は碑文にハナン・ヘス Hanaï Jesus である。アッセマンニ Assmanni の『耶蘇教史』に據るに、

キストル教の第二十四祖の法主に、ハナン・エスとあるのが、即ち景教碑の寧恕のハナン・エスたるべきは疑を容れぬ。たゞ法主ハナン・エスは、西暦七百七十八年に死んだと傳へられて居る。七百七十八年に死んだハナン・エス(寧恕)が、七百八十一年建設の景教碑に、知_二東方之景衆_一也とあつて、こゝに年代の齟齬が避け難い。この點に關しては、已にアツセマンニ以來、當時バグダードのキストリアン法主廳と、支那の如き遠隔の地方に在る教會との間には、毎六年に一度音信を通ずる規程であつたから、法主ハナン・エス永眠の報は、七百八十一年景教碑建設の頃に、未ば支那に到達せざりしものとして、この年代の齟齬を説明して居る。(「ホーン『支那西達記』Yule, "Cathay and the Way thither." vol. I. P. xciii—xciv)

佐伯君はライト Wright や、バッチ Judge に據つて、ハナン・エスは七百八十年の後半に逝去し、

その後嗣のチモシ Timothy は、七百八十一年二月に法位に即いたものとして、七百八十一年二月四日の景教碑建設の時には、法主永眠の報が長安に到達し得なかつたものと斷せられて居る。ハナン・エス逝去の年代を下げる——佐伯君は七百八十年の後半と斷せらるゝが、較ろ七百七十九年の後半の方が妥當の様に思はれる——ことは、兎に角、年代の齟齬の説明を一層容易ならしむるものである。

三

(IV) 曩にベリヨ氏が燉煌で發見した遺書の中に、「景教三威蒙度讚」と「尊經」とがある。何れも唐代の景教を研究すべき屈竟の材料である。この二者に關する研究は——少くとも吾輩の知る所では——今まで未だ發表されて居らぬ。佐伯君は始めてこの二者の英譯及び研究に手を著けられた。

「景教三威蒙度讚」——佐伯君の英譯に據れば、

「The Nestorian Baptismal Hymn to the Trinity —」の譯は六十六乃至六十七頁に「尊經」——「The Nestorian Book of Praise, dedicated to the Living and the Dead」——の譯は、六十七乃至七十頁に涉つて居る。中に就いて「尊經」の中に開列されてある、法王及び尊經の名目の解釋比定は、尤も參考に價すると思ふ。或者は説明が餘りに簡略なる爲め、或者は吾輩のキリストル教に關する智識の不足なる爲め、その比定の理由を十分に了解し兼ねる所も尠くないが、兎に角吾輩は之によつて多大の裨益を受くべきことを疑はない。

證身盧訶寧俱沙に對する *Ruha de Knda* —— *the Holy Spirit* を始め、瑜罕難法王に對する *John (Johannes)*、盧伽法王に對する *Luke*、明泰法王に對する *Matthew*、牟世法王に對する *Moses*、寶路法王に對する *Paul*、摩薩吉忠法王に對する *Mar Sergius*、憲難那法王に對する *Kennya*、賀

薩耶法王に對する *Hosea*、裨盧法王に對する *Car* 又馨遺經に對する *The Book of Charity*、刪可律經に對する *Zacharia Sutra*、伊利耶經に對する *Elijah Sutra*、師利海經の師利海に對する *シリア語の Shikha*、慈利波經の慈利波に對する *シリア語の Tsurika* 等の擬定は、信憑すべき様に思はれる。たゞ摩矩辭法王に對して、佐伯君は *Mar George* を擬せられて居るが、之れは *ペリヨ氏* に從つて、

（『極東學院公報』 *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient*, 1908. P. 519, *Markus (Mark)* に擬定する方が妥當であらう。尙ほ「尊經」の最後に在る八十餘字の跋文を、如何なる故か、佐伯君は全く看過して、英譯を加へられなかつたのは、甚だ遺憾である。この跋文は唐代の景教を研究するに、大に參考に資すべきものと思ふ。

(V) 佐伯君は景教と他の東亞に行はれた諸宗教との關係、—(A) 景教とマホメット教(回教)、(B)

景教と道教の一派の金丹教との關係(C)景教と大乘佛敎殊に眞言宗及び眞宗との關係——を説明するに、尤も力を盡されて居る。これらの關係は何れも大問題であるだけ、佐伯君の提供された理由のみでは、不十分でないかと疑ふ。尠くとも吾輩は、差當り佐伯君の主張に賛同することを躊躇せなければならぬ。

佐伯君は唐の武宗の會昌五年(八四五)の敕に、大秦穆護祆僧。皆勒歸俗とある、穆護祆が或は穆護祇となつて居るに據つて、之をマホメットの音譯と認められて居る。(四七頁)從來の學者は此穆護祇(祇)に對して、種々の解釋を下したことはアザンの著書 (La S. yle Chrétienne de Sing-n-fou. II. P. 252—253)を見れば、略明瞭であるが、ラクーペリ Lacouperie 之之をマホメットの解して居る。『中央及東亞文字源流』Beginnings of Writing in Central and Eastern Asia. P. 83) 佐伯君の所説も

多分ラクーペリのそれに基いたものであらう。併しこれは勿論間違であつて、大秦穆護祆僧とは、キリストル敎(景教)とゾロアストル敎(祇教)の僧侶を指したものである。(『那珂通世遺書』の「成吉思汗實錄續編」一四四頁參看)

實際唐時代に、回教は支那内地に布教されて居らぬ——沿海の貿易港に滞在するアラブ商人等は別として——等故、特に禁制する必要ないのである。

(明治四十五年七月の『藝文』に掲げた拙稿「創建清真寺碑記」參考)降つて元時代となつても、支那に於けるキリストル敎と、マホメット敎とは、明に區別されて、混同して居らぬ。佐伯君の會昌禁制の後、景教徒は次第に回教徒の中に混入することゝなつたといふ主張(四八頁五二頁)は、やゝ信憑し難い様に思ふ。

(VI)佐伯君が景教と金丹教の關係を説明せんが爲に、景教碑文の筆者の呂秀巖と、金丹教の祖師呂巖

とは同一人なるべきを、可なり巧に立證すべく努力されて居る。(五六—六〇頁)吾が輩は贊同を躊躇しつゝも、この新奇なる主張を興味深く感じた。(VII)佐伯君はネストル教徒が特に景教といふ宗名を選定したのは、當時唐の上下に歓迎されて居つた大日教に因むたので、日と京とより成立する景の字には、大日の意義を寓してあり、景教とは畢竟大日教の意味であると主張されて居る。(一二八頁)又佛教徒の孟蘭盆は景教に仿ひ、支那の祖先崇拜の國風に一致する目的で倣められたるもの、佛教徒(眞宗)の妻帯は景教徒から受けた影響であらうと主張されて居る。(一四〇頁—一五三頁)併し此等は要するに一の設想に過ぎぬ。佐伯君の自白さるゝ通り直接の證據は提供し難いとしても、縦令間接の推理にても、今一段確實なるものを希望したい。

四

全篇を通じて漢文の誤譯が多少目に著く様である。今心付いた二三を擧げると、(I)景教碑文の筆者呂秀巖の肩書に、朝議郎前行台州司士參軍とある解釋が間違つて居ると思ふ。朝議郎とは、文官正六品上の階級に屬することを示すのみで、朝議の二字に實職の意味はない。從來の註解者が之を *The Secretary of the Imperial Council* となし譯したものは、勿論間違であるが、佐伯君が之に前行の二字を添へ、朝議郎前行を一の實職の如く考へて、*Assistant Secretary of State* と譯されたのは一層の間違と申さねばならぬ。こゝは單に「文官正六品上の待遇を受くべき資格を有する」と譯すべきものと思ふ。

州の司士參軍は從七品下の官職で、州内の土木工藝のことを管理する。參軍とあつても、必しも軍事に關係せぬ。佐伯君が之を *Superintendent of the Civil Engineering Bureau* と譯したのは、確

に從來の多くの註釋者——司士參軍を武官の如く考へた——に勝つて居る。たゞ朝議郎（正六品上）の呂秀巖が、曩に台州の司士參軍（從七品下）の實職に就いたから、前行といふので、前行の二字は勿論、台州司士參軍の六字を管到せなければならぬ。

(11) 附録に收めた大唐故波斯國大酋長、右屯衛將軍、上柱國金城郡開國公波斯君丘之銘は清の端方の『陶齋臧石記』に收めてはあるが、從來餘り世間に知られなかつた。吾輩が去る大正二年の春、佐伯君に面會した時、佐伯君は新に上野の帝國博物館に到來した、この碑銘の拓本に就いて研究されて居つた。畧同時にわが同僚の羽田（亨）君が、この拓本を『東洋學報』（大正二年十一月）上で紹介されたことがある。

さて佐伯君はこの文中の建「造天樞」の句を全く誤解されて居る。こは已に羽田君が解釋された通り、則天武后の時代に建設した、大周萬國頌德天

樞を指せしこと疑ない。差充「拂林國諸蕃招慰大使」の拂林國諸蕃とは、拂林國所屬の諸蕃族と解すべきもので、佐伯君が諸蕃をチベットと譯されたのは勿論間違である。四序増慕。無「輟」於春秋。二禮尅脩。不「忘」於生死。の四序は春夏秋冬（即ち春秋）を指し、二禮は生死を指すのである。之に對する佐伯君の譯文は流暢ではあるが、やゝ本文の意味を離脱した憾がある様に思ふ。

漢文の誤譯以外に、史的事實を間違へられた點も尠くない。本書三頁より四頁にかけて記述されてある、支那の首都としての長安の沿革は、年代事實ともに正確を失して居る。三十九頁以下に、古代に於ける東西の交通を概説されて居るが、中に就いて春秋時代の白狄を、遠西の蕃客と解された如きは論外としても、西漢時代の張騫の遠征、東漢時代の甘英の遠征等に關する記事には、一一々は臆列せぬが——可なり間違ある様に思ふ。

五

卷末の附録に、景教碑及び景教に關係ある支那人の記録を網羅されてあるが、未だ十分とはいへぬ。

(I) 『冊府元龜』卷五百四十六に、波斯僧及烈のこゝを載せてある。及烈 (Gadilic?) は景教宣傳に特別の功勞あつた人で、景教碑文中にも、その事蹟が勅されて居る。『冊府元龜』の記事に關して、吾輩は已に『藝文』(大正四年十一月)に、¹「キリストル教の僧及烈に關する逸事」と題する一小論文を掲げて置いた。

(II) 清の朱一新の『無邪堂問答』卷二に、評三黎佩蘭景教流行中國碑考²といふ一論文がある。あらゆる支那の學者の景教碑に關する論著の中で、この朱一新の論文―彼も亦支那の學者の通弊として、景教を波斯火教と斷じ、祇教を波羅門教と認め、摩尼教を回教に擬するなどの僻説もあるが一

は尤も注意に價すると思ふ。吾輩は同僚の矢野君の注意によつて、始めてこの論文を知つた。

右の史料は何れも從來學界に知られずにあつた歎くともアヴレを始め、從來の景教碑研究者の著書に収録されてなく、佐伯君も亦注意されて居らぬ。

× × × × ×

吾輩は兎に角、我が國人によつて、唯一の景教碑に關する著書の世に公にされたことを喜ばねばならぬ。著者佐伯君の熱心に對しては多大の同情を有して居る。その著書に對して、忌憚なき批判を加へ、若干の瑕疵と思はるゝ點を指摘したのも畢竟備を求むる微衷に外ならぬ。この書を再版に付せらるゝ時、幾分なりと吾輩の注意を聽かれて補正せらるゝ所あらば、實に本懐の至りである。

(十二月一日)